

親鸞の念仏観における宗教性について

中山 彰 信

序

親鸞の念仏観における宗教性についてという標題を掲げているが、ここでいう宗教性とは、救済の正因ということについての考察と考えていただきたい。

近年、龍谷大学の信楽氏が、論文『親鸞における念仏の意味』⁽¹⁾に、「称名念仏とはひとえに信心成立のためのプロセス、の意味をもつものであった。」又、「称名念仏とは、その実践論的な側面に限って言えば、日々における不断の反復相続が心理的な効果をもたらして、やがて宗教的体験としての心澄浄なる信心を成立せしめることになる。」と述べられ、又、岡氏は論文『親鸞の称名思想の一考察』⁽²⁾に「行巻」と「信巻」の關係について、「順序よりみても明らかなように、行巻は信巻に先して、信後の報恩行というがごとき性格ではない。……（中略）……行巻の称名は信が主であるに對し、従としての称名ではないのだ。行と信が全く同格か、あるいは信

を生ぜしめる称名として、より重要な意義を持つときえいうるからである。されば、行巻の称名は、信心正因、称名報恩といった思想では、捉えられないものになる。」又、「第七願の思想を大行といい、この大行を称名とする。しかもこの称名には、正因が語られ、信を生ぜしむるものだと言われる。」と述べられ、岡氏の説は、称名念仏こそ正因に近いものであると考えられ、それが親鸞の念仏観であるように受けとれるのである。私自身、従来の「信心正因、称名報恩」の念仏観を持っていたので、新たな疑問を感じ、親鸞の念仏観を再考せざるを得なくなった。

一

そこで、親鸞は『歎異抄』第二章に、「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せをかぶりて信するほかに別の子細なきなり。」⁽³⁾と述べられ、又『高僧和讃』には「智慧光のちからより、本師源空あ

らはれて、浄土真宗ひらきつつ、選択本願のべたまふ⁽⁴⁾と述べられているように、法然の教えである称名念仏を繼承されたことを表明し、一步も法然を超えていないことを常に強調せられ、真宗の興行を法然の功と示されている。それにもかかわらず、『教行信証』をあらわされたのは、何故であったのか。それは、その当時、念仏に対する弾圧が行なわれ、又、法然門下の中でも異説が称えられていた故、法然の念仏の意義より深く徹底しなければならなかったかと考えられる。故に、『教行信証』の後述に「真宗興隆大祖源空法師⁽⁵⁾」と述べられている。これを見ても、親鸞は法然を超えないことを示し、法然の真意を的確にあらわしたものにすぎない考であり、従って、『教行信証』は『選択本願念仏集』の註釈書であると考えていたと推察される。

二

そこで、親鸞は念仏を如何に捉えていたかを考える場合、法然の意をそのまま受け入れているとすれば、信心正因をうらずける称名念仏という捉え方も出来るはずで、信樂・岡両氏の説も一応と言えるのではないかと推察される。そこで、親鸞の念仏觀といえ、⁽⁶⁾「行巻」が中心であると考えられる。「行巻」の標拳に、「諸仏称名之願 浄土真実之行 選択本願之行⁽⁶⁾」と、第十七願があらわされている。その第十七願は「設我得仏、十方世

界无量諸仏、不悉咨嗟称我名者、不取正覚⁽⁷⁾。」と十方世界の無量の諸仏が阿弥陀仏の名をほめたたえることが述べられ、この阿弥陀仏の名こそ、浄土真宗の行であり、選択本願の行なることを明らかに示す卷なることを示しているのである。しかし、法然は第十八願を選択本願とし、王本願と明かしているのである。親鸞は偈前の文に「凡就誓願、有真实行信、亦有方便行信、其真实行願者、諸仏称名願、其真实行願者、至心信樂願。斯乃選択本願之行信也。」と述べ、諸仏称名の願と至心信樂の願が、選択本願の行信と述べられている。明らかに、法然と異なると言える。このことは、親鸞が第十八願の乃至十念の解釈に注意され、十念の称名念仏と解した場合、自力の称名念仏とも誤解され、念仏が単なる衆生の行でないことを注意されて、詳細に念仏を解釈されたと窺われる。故に、「行巻」の最初に「謹按往相廻向、有大行、有大信。大行者、則称无碍光如来名。斯行、即是摂諸善法、具諸徳本、極速円満、真如一実功德宝海。故名大行。然斯行者、出於大悲願⁽⁸⁾。」と意解され、親鸞は「行」と言わず、「大行」と示されたのは、衆生の行でなく、阿弥陀仏の衆生救済の爲の行である故に、「無碍光如来の名を称する」と述べられ、その後に、如来の功德を示されている。その如来の行を「大行」と明かされたのである。衆生から仏への呼びかけと解して称える念仏は「大行」に値いしないものと言える。故に、

「信」も同様の意味を持つものとして「大信」と解釈されたのである。

親鸞が称名を「行巻」の最初に示されたのは、「行」自体のもつはたらきが衆生の称名行ではなく、あくまでも如来のはたらきを示す「行」であることを示す。その後、「即是名諸仏称揚之願、復名諸仏称名之願、復名諸仏咨嗟之願、亦名往相廻向之願、亦可名選択称名之願也。」⁽¹⁰⁾と意解し、第十七願は諸仏が阿弥陀仏の名を仏徳讃嘆されたものであることを顕わし、そのような念仏である故に、「大行」と示された。

この後、根本經典等の引文を引かれ、第十七願の「大行」の意をあかされていくのである。七祖までは第十八願のみをもつて念仏の信行とみられていたが、親鸞においては、第十七願、第十八願の両願もつて展開されている。故に、「行」の中に「信」を含み論を展開されていることが窺える。

称名破満の私積において、「爾者、称名能破衆生一切无能満衆生一切志願。称名則是最勝真妙正業、正業則是念仏、念仏則是南无阿弥陀仏、南无阿弥陀仏即是正念也。可知。」⁽¹¹⁾

と示し、このことは、仏徳讃嘆された名号を信じて称名することであり、名号の徳によって、一切の衆生を救済する真实性を示し、又、名号の絶対性を明している。名号が「大行」を意味するのである。それは、選択本願の行を示すものである。選択本願の行とは、大悲の願による廻向であり、法然に

おける六字釈は善導の相承であったが、親鸞においては、善導の六字釈を「行巻」に引用し、「爾者、南无之言帰命。：

（中略）：是以、帰命者本願招喚之勅命也。言発願回向者、如来已発願回施衆生行之心也。言即是其行者、即選択本願是也。言必得往生者、彰獲至不退位也。……中略……金剛心成就之具也。」これは、善導の六字釈が阿弥陀仏の名である六字を称えることにおいて、仏果を証するのに必要な願行を具足するとしたのに対して、南無阿弥陀仏そのものが本願の招勅であり、如来の選択本願が衆生の行となることをもつて他力廻向を示そうとしたものである。善導の六字釈は、衆生の所稱の名号について解釈されており、親鸞における解釈は、六字の名号をもつて如来の大悲である他力廻向の願力が成就せられたことを示したもので、願行具足の南無阿弥陀仏であることがあかされたのである。私積に、「明知、是非凡聖自力之行、故名不回向之行也。大小聖人、重軽悪人、皆同齐応帰選択大宝海、念仏成仏。」⁽¹³⁾と意解されたことは、願行具足の南無阿弥陀仏であることを明確にしたものと言える。

親鸞における「不廻向」とは、法然の言葉を受けたもので、衆生の立場から見た場合のことであり、廻向の成立は阿弥陀仏より衆生への方向のみであることをもつて、「行」が真実行として、又、本願招換の勅命としての意味をもつことを示そうとしたものである。それは、阿弥陀仏の大悲の願心

による廻向にはかならないことをはっきりと規定しているのである。

親鸞は真実行としての不廻向の念仏を称することを「爾者、獲真実行信者、心多歡喜故、是名歡喜地。……中略……歸命斯行信者、攝取不捨、故名阿弥陀仏。是曰他力。」と述べられていることは『末灯鈔』に

信をはなれたる行もなし行の一念をはなれたる信の一念もなし。⁽¹⁵⁾

と述べられる言葉にてらしても、行信不離の称名を的確に述べたものである。「攝取不捨」の故に「阿弥陀仏」といわれるのは、「攝取不捨」というはたらきをもって「名」の本質とすることが示されている。その故に他力積に「言他力者、如来本願力也。」⁽¹⁶⁾と言ってまとめている。親鸞は選択本願の行の意義を如来の本願力廻向ということをもって明確にされたと言える。「名」を称えることは衆生であっても、衆生から見れば不廻向なのである。なぜなら、仏から廻向された行だからである。故に、親鸞は「大行」と名づけたのである。

ここに、平等に救済される道が開かれ、「行」が絶対性、普遍性・真実性をもつことにおいて、真実行としての意味をもつ。故に、真実とは仏を意味することもわかる。

又、その後に二教二機対の私積がほどこされ、「然就教念仏諸善比校対論、有難易対・頓漸対……中略……斯義如斯。

然按本願一乘海、円融満足極速无寻絶対不二之教也。」⁽¹⁷⁾と四十八対を教法の上で比較して、諸行に対して、念仏の価値の超勝性をあらわし、本願念仏の一乗海はよろずの善根が満ちあふれ、いかなる悪業煩惱に障えられることなく、速かに証りを得しめる唯一絶対の数であることを示し、法の絶対性をあかしている。そのことを『一念多念文意』には

いま一乗と申すは本願なり。円融と申すは、よろづの功德善根みちみてかくることなし、自在なるころなり。無碍と申すは、煩惱悪業にさへられず、やぶられぬをいふなり。真実功德と申すは名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆゑに、大宝海にたとへたまふなり。一実真如と申すは無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり、法性すなはち如来なり。宝海と申すは、よろづの衆生をきはらず、さはりなくへだてず、みちびきたまふを、大海の水のへだてなきにたとへたまへるなり。⁽¹⁸⁾

と、同じ意味の内容を述べている。又、次に機について、「亦就機対論、有信疑対、善惡対、正邪対、是非対、実虚対・真偽対・淨穢対・利鈍対・奢促対・豪賤対・明闇対・斯義如斯。然按一乘海之機、金剛信心絶対不二之機也。」⁽¹⁹⁾と、十一対をあげ、念仏の機と諸善の機とを比較して、他力念仏を讀え、唯一絶対の教法たる名号が衆生の金剛の信心となつてあらわれ、唯一絶対の機となることを示し、信心を得る機をあ

かしている。これらのことを『愚禿鈔』に、

本願一乗は、頓極・頓速・円融・円満の教なれば、絶対不二の教、一実真如の道なりと、知るべし。専がなかの専なり、頓がなかの頓なり、真のなかの真なり、円のなかの円なり。一乗一実は大誓願海なり。第一希有の行なり。金剛の真心は、無碍の信海なりと、知るべし。⁽²⁰⁾

と述べている。

このことは、親鸞が教法の理法が非常にすぐれているのに対し、機が修する念仏がまたいかにすぐれたものであるかを示し、阿弥陀仏の理論・実践とともに、衆生にとって唯一絶対の真実の救済を示す普遍的な真実であることをあかし、一乗中の一乗であることを強調しているのである。

結

以上のことから、親鸞は衆生救済の真実性を第十七願を中心に考慮し、念仏が「大行」であり、その超勝性をあかしていくのである。

その内容から考えれば、念仏行は他力の念仏として「大行」であると考えられ、すなわち、念仏行は如来より廻向された本願力廻向の行であり、本願力廻向の信心でもある。故に、称名念仏も大行となるのである。親鸞が、念仏を普通の絶対性・真実性・平等性と意図した所が窺える。

親鸞の念仏観における宗教性について（中山）

今回の考察から、親鸞の念仏観について、信楽・岡田氏の称名念仏こそ正因に近いものという考えは、どうしても納得できない。私自身、親鸞は「信心正因、称名報恩」の意として念仏を救済の正因と解していたと考える。今回は「行巻」を中心とした一視点にすぎず。親鸞の念仏の本質解明にあたっては「信巻」との関連性においても再度考察してみなければならぬと考えている。

- | | | |
|----|------------------|-------------|
| 1 | 『印度学仏教学研究』第二十卷の二 | 六七七頁・六七八頁 |
| 2 | 『宗教研究』第四十六卷の三 | 一五六頁 |
| 3 | 『真宗聖教全書』二卷七七四頁 | 4 同 二卷五二三頁 |
| 5 | 同 二卷二〇一頁 | 6 同 二卷五頁 |
| 7 | 同 一卷九頁 | 8 同 二卷二 |
| 9 | 同 二卷五頁 | 10 同 二卷五頁 |
| 11 | 同 二卷八頁 | 12 同 二卷二二頁 |
| 13 | 同 二卷三三頁 | 14 同 二卷三三頁 |
| 15 | 同 二卷六七二頁 | 16 同 二卷三五 |
| 17 | 同 二卷四一頁 | 18 同 二卷六一五頁 |
| 19 | 同 二卷四一頁 | 20 同 二卷四五八頁 |

〈キーワード〉 救済の正因、大行、真実

（麻生福岡短期大学助教授）